〔心理臨床センター開設25周年・新札幌キャンパス移転記念号によせて〕

25年間立ち位置宣言

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科　**山　本　　彩**

心理臨床センターが開設されてから25年が経過した。今日まで心理臨床センター業務に携わってこられた教職員の皆様に心から敬意を表するとともに，支えてきてくださった地域の皆様に心からの感謝の気持ちをお伝えしたい。偶然にも「25年」というのは私が心理臨床家としてデビューしてからの年数と同じ年数である。25年という年月の長さと，そして逆に短さにも想いを馳せながら，心理臨床家としての私のこれまでの25年間と今後の25年間について今思うことを書き残しておきたい。随分生意気なことを書くことになると思うが，節目のこの機会に自分の考えと向き合いたいという想い故と，どうか読者の皆様にはご容赦いただきたい。

心理臨床家としてデビューした当初，私は「地域で“ちゃんとした”臨床ができないといけない」という明確なポリシーを持っていた。もっと正確に言うと，「地域で“ちゃんとした”臨床ができない大学教員にはなりたくない」と考えていた。何がきっかけでそんな風に鼻息荒く考えるようになったのか。全く今記憶にないが何かにつけ鼻息の荒い私のことなので，なぜだかそう考えるようになったのも不思議ではない。はたして“ちゃんと”できていたかはわからないが，有難いことに心理職として長年，正職員も管理職も経験させていただき，地域のど真ん中で臨床をしてきたという実感を持つことはできている。余談になるが，若い人にはぜひ一度は正職員と管理職を体験していただきたい。なぜなら正職員でなければ知ることができない「組織としていい仕事をする」「自分がやりたい仕事ではなく組織としてやるべき仕事をする」ということを，対人援助の専門家として体験しておくべきだと考えるからである。また管理職でなければ味わうことがない「クライエントも従業員も守る」ということの責任の重さや，時としてそれが利益相反し，葛藤の中で決断を強いられるということも経験してみていただきたい。私が尊敬してやまない，ある先輩臨床家も私と同じように「正職員」説を唱えていらっしゃるのをお聴きし，「やっぱりそうか」と嬉しく思ったものである。

臨床経験が15年程経過した頃，「地域で“ちゃんとした”臨床ができないといけない」一辺倒だった私は，徐々に他の想いも抱くようになった。それは「地域も“ちゃんと”しないといけない」という想いであった。何がきっかけでそう思うようになったかはやはりよくわからない。臨床経験を少しばかり積んだことで視野が広がり，それまでクライエントと自分の間にだけ当たっていたフォーカスが地域に広がったためそう想うようになったのか，はたまた，児童虐待や発達障害の二次障害，司法福祉連携のケースの割合が徐々に多くなっていったことから社会要因への問題意識が強くなっていったのか。今振り返っても理由はよくわからない。何にせよ社会要因への問題意識が高まっていったわけだが，ちょうど時期同じくして，様々な地域の委員や役員を拝命する機会も増えていった。私は委員や役員として，地域における課題と対応策を提言し，地域にネットワークを構築し，様々な講演会やイベントを企画していった。心理的側面と社会的側面に同時に携わることができることに大きな喜びとやりがいを感じるようになっていったのである。しかしそんな活動を続けていたある日―当時の私は随分とおごり，浮かれていたのだと思うが―，突如頭の上に大きなたらいが落ちてきたようなショックを受けるでき

事に遭遇した。私の心理社会的な活動について，ある大きな精神医学関係の学会でシンポジストの一人として登壇し話をする機会をいただいたのだが，指定討論者がシンポジウム全体に対して以下のように評したのである。「誠意に満ち，工夫を凝らし，丁寧に進めている様子が伝わり，何より心丈夫な印象が持てた。ただ，先に指摘した点は，臨床知識や臨床技法によるところもある。知識や技法も積み重ねないと世界の流れに取り残される。真剣に取組んだ結果として我が国の児童青年精神医学臨床が，エビデンスのない経験のみの積み重ねという，妙なガラパゴス化をしてはいけないので，注意をしたい」（長尾，2019）。また私の発表については個別に以下のように評された。「地域づくりとは演者が自治体協議会に提言することとしている。提言は結構だが，その程度の事で「地域づくり」という難問に立ち向かうのは難しいと思われるが，具体的内容とその成果を報告してほしかった」「多機関連携は連携困難による対応不足やサービスの漏れが生じやすく，世界中で失敗に終わっている」「キャッチコピーだけでなく，そのようにできているのか否かの検証方法とそのエビデンスを示してほしかった。でないと臨床が科学として存在しない」（長尾，2019）。私はショックで頭が真っ白になったが，数日後，自分の中にこれまで体感したことがない感覚が芽生えるのを感じた。

その後私がシンポジウムを振り返り書いた文章が以下である。「指摘いただいたガイドラインづくりや臨床試験，それらに基づき地域システムを変革していくこと，システマティックレビューをすることの重要性は頭の片隅に感じながらその時間もエネルギーも足りず，目の前の臨床に必死にしがみついてきた12年間だったように思う」「様々なことを言い訳に「ガラパゴス化」に加担してよいのだろうか？「ガラパゴス化」することも当事者と家族にとって大きな不利益なのではないだろうか？」「頭と気持ちを整理するのに数日要したが，自分への言い訳を捨て臨床と研究の両立を目指そうと心新たにしたところである。自分がただ落ち込むだけではなく心新たにできたのは，指定討論者のたゆまぬ臨床と研究の両立への真摯な姿勢を見ることができたからである。大御所とよばれる先生たちでさえ今尚このような努力の時間を惜しんでいないのだ」（山本，2019）。次の25年間については，この記述の通り科学としての臨床を追求する25年間にしていきたいと考えている。また，大きすぎる目標だがその結果として，この先生のように臨床について厳しくも的確な意見を述べられる人となれることを目指したい。心理臨床センターは今後も，そんな私の科学としての臨床を支え，院生，教職員，修了生，地域をつなぎ，拠り所としてあり続けてくれることだろう。

文　献

長尾圭造（2019）：シンポジウム９「青年期の素行問題について～外来でできること」　指定発言．児童青年精神医学とその近接領域，60(5)，569-573.

山本彩（2019）：シンポジウム９「青年期の素行問題について～外来でできること」多機関異業種連携のあり方と危機介入．児童青年精神医学とその近接領域，60(5)，563-568.